生長の家環境マネジメントシステム

2018年度　環境パフォーマンス報告書

ISO14001国際規格の「9 パフォーマンス評価」に基づき、2018年度（1月～12月）の生長の家教団における環境パフォーマンスを報告いたします。

発　行：2019年11月25日
作　成：宗教法人「生長の家」国際本部環境共生部
担　当：環境共生部（桜井、山崎）
問い合わせ先：山梨県北杜市大泉町西井出8240番地2103
TEL. 0551-45-7747（直通）

教団としての啓発活動

生長の家では、2017年度からスタートした「“新しい文明”の基礎を作るための3か年計画」の運動方針のもとに、布教活動を計画的に展開する中で、多くの人々に自然と人間との一体感を深めてもらい、地球環境問題の解決に貢献する生き方を推奨しました。

新年のビデオメッセージで

2018年1月1日、谷口雅宣・生長の家総裁の新年のビデオメッセージを、生長の家公式サイト及びYouTubeで一般に公開。メッセージの中で、自然の繁栄が人間の幸福であるような“新しい文明”の基礎作りとして、3つの生活実践、①ノーミート、低炭素の食生活、②省資源、低炭素の生活法、③自然重視、低炭素の表現活動に取り組み、それぞれ「SNIオーガニック菜園部」「SNI自転車部」「SNIクラフト倶楽部」を通じて具体的、組織的に展開することを呼びかけました。同ビデオは、英語、ポルトガル語、スペイン語、中国語、韓国語の字幕版も同時に公開されました。

2018年元旦に公開された谷口雅宣・総裁の新年のビデオメッセージ（日本語版）

講習会、練成会、講演会等で

谷口雅宣・総裁、谷口純子・白鳩会総裁を講師とする生長の家講習会が、28教区98会場（映像配信の82会場を含む）において開催され、約8万人が参集。その他、本部直轄練成道場、教化部における練成会（合宿形式で教えを学び実践するつどい）、教区での講演会、誌友会（教えを学ぶ小集会）が開催され、それらの行事の中で環境保全に関する啓発が行われました。

生長の家講習会（2018年9月16日、島根県安来市総合文化ホールアルテピア）

書籍、月刊誌、インターネットで

谷口雅宣・総裁著の『凡庸の唄』、『神さまと自然とともにある祈り』（共に2018年刊）、谷口純子・白鳩会総裁著の書籍の頒布を通じて、環境保全の必要性や自然と調和した生き方を促しました。
また、生長の家の組織会員向けの機関誌『生長の家』、一般向けの月刊誌『いのちの環』（総合誌）『白鳩』（女性誌）『日時計24』（青年誌）に、毎号、環境保全に関する記事を掲載しました。加えて、同月刊誌3誌の毎号の記事各4本ずつ（環境保全の記事を含む）を掲載する「3in1（スリー・イン・ワン）」のウェブサイト（運営：株式会社日本教文社）により啓発に努めました。http://hidokeilife.com/s/

一般向けの月刊誌『いのちの環』『白鳩』『日時計24』（各2018年1月号）

ラジオ放送で

毎週日曜日（一部の局では土曜日）の早朝に、ニッポン放送をはじめ、全国13局で生長の家本部講師によるラジオ放送番組（講話）をオンエアしました。毎月の放送回のうち1週の講話は「環境」をテーマとして啓発を行いました。
同番組はインターネット上のYouTubeでも公開され（毎週日曜日に公開）、パソコン、スマートフォンで、いつでもどこでも視聴できるようになっています。

YouTubeで公開しているラジオ放送番組（2018年3月の放送分）

プロジェクト型組織（PBS）の活動を通して

生長の家のプロジェクト型組織（PBS）は、従来から布教活動を担っていた組織（白鳩会、相愛会、青年会）とは別に、自然と調和した“新しい文明”のライフスタイルへの転換を具体的な活動を通して促す組織（メンバーは組織会員の希望者）として作られました。PBSには、「SNIオーガニック菜園部」、「SNI自転車部」、「SNIクラフト倶楽部」の3部があり、それぞれ「ノーミート、低炭素の食生活」「省資源、低炭素の生活法」「自然重視、低炭素の表現活動」を、ミニイベントを開催したり、facebook等のSNSを通じて活動の情報を発信し、共感の輪を広げています。PBS各部のメンバー数は以下の通り。

◆オーガニック菜園部：1,054名（前年比+624）
◆自転車部：569名（前年比+185）
◆クラフト倶楽部：857名（前年比+517）　※2018年11月9日現在

【SNIオーガニック菜園部の公式サイト】
https://www.jp.seicho-no-ie.org/org-garden/
【SNI自転車部の公式サイト】
http://sni.bike/
【SNIクラフト倶楽部の公式サイト】
https://www.jp.seicho-no-ie.org/craft/

島根教区のSNIクラフト倶楽部のメンバーが開催したミニイベント（余り布で手縫いのティッシュケースづくり）

PBSのロゴマーク：上からSNIオーガニック菜園部、SNI自転車部、SNIクラフト倶楽部

“自然の恵みフェスタ”を通して

生長の家では、地域とのつながりを深めながら、自然と調和した“新しい文明”のライフスタイルを伝えるためにPBSが運営を担い、国際本部である“森の中のオフィス”（山梨県北杜市）とその周辺を会場として「生長の家　自然の恵みフェスタ」を開催。5回目となる2018年度の同フェスタは、10月20～21日にかけて開催しました。

SNIオーガニック菜園部では、地元からの出展者とともに、肉類を使わないノーミート料理や地域の無農薬・オーガニック食材を使った料理や食品を販売したほか、有機栽培農家を招いてトークイベントを開催し、低炭素で倫理的な食生活を呼びかけました。

SNI自転車部では、フェスタ初日に自転車による登坂イベント「天女山ヒルクライム2018」を開催し、海外からの参加者を含む過去最多の85名（前年比9名増）が出場するなど、低炭素な移動手段である自転車の魅力や楽しさをアピールしました。

SNIクラフト倶楽部では、部員がプラスチック素材を使わず、身近にある自然素材を材料にしたクラフト作品を展示販売したり、地元のクラフト作家によるワークショップを開催して、手を使い、創意工夫をしてクラフト作品をつくる喜びを体験してもらいました。

そのほか、「神・自然・人間は本来一体」であるという生長の家の教えや生物多様性の尊重の考え方を取り入れたコンピューターゲーム「ムスビ・ワールド」が昨年よりバージョンアップして公開されました。

この「自然の恵みフェスタ」は、国内の教区や海外の布教拠点でも開催され、それぞれの地域において、自然と調和したライフスタイルへの転換をアピールしました。

有機栽培農家によるトークイベント

天女山ヒルクライムのスタート風景

自然界に満ちている“ムスビ”の働きをゲームで表現した「ムスビ・ワールド」も大好評

家庭での取り組み

生長の家の組織会員は、「“新しい文明”の基礎を作るための3か年計画」の2018年度の運動方針に基づき、自然と調和した低炭素なライフスタイルへの転換を進め、地球環境問題の解決に貢献する生活実践に取り組みました。

「生活の記録表」の活用をすすめる

「生活の記録表」（生長の家国際本部発行、43,000部）を活用し、電気、ガス、水道、灯油、ガソリンの消費量とCO2排出量を記録して、その量を減らすことに取り組みました。この取り組みは2001年度から継続しています。

また、谷口純子・白鳩会総裁監修の『日時計日記　2018年版』（生長の家刊）を活用して、その日の「環境に配慮したこと」の記載や毎月の記録コーナーで「生活の記録表」と同じ内容の記録表を用いて記載することを推奨しました。

「生活の記録表」（2018年版、A5判4頁）

『日時計日記』（2018年版、B6判上・下巻）

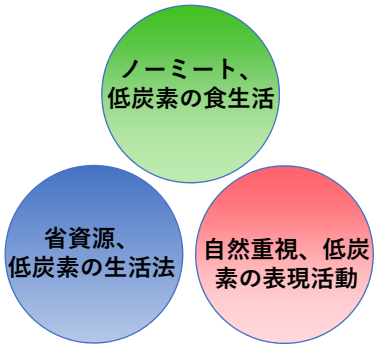
信仰に基づく「倫理的な生活者」としての実践

信仰に基づく「倫理的な生活者」として、以下の3つの生活実践に取り組みました。

「ノーミート、低炭素の食生活」として、ノーミート料理を取り入れたり、食品を購入する際には、できるだけ地産地消、旬産旬消を心がけ、自然食品やオーガニック食品を選択することを推奨しました。また、家庭菜園（ベランダ菜園）に取り組むことをすすめました。

「省資源、低炭素の生活法」として、環境負荷の低い移動手段である自転車をはじめ、できるだけ公共交通機関や電気自動車やPHEV車の利用を呼びかけました。また、2016年4月からの電力の自由化に伴い、原発由来ではなく、環境負荷の少ない再生可能な自然エネルギーからの電力の調達比率が高い新電力（PPS）を選択することを推奨しました。

「自然重視、低炭素の表現活動」として、プラスチック素材ではなく、低炭素な自然素材やリサイクル素材を用いたクラフト（手芸作品）づくりをすすめました。



信仰に基づく「倫理的な生活者」としての3つの生活実践項目

自然エネルギーの拡大を推進

生長の家では、自然エネルギーの利用を促進することで、「脱原発」と「地球温暖化の抑制」を実現するために、組織会員や信徒だけでなく、志を同じくする人々からの寄付を広く募って、メガソーラー発電所や大規模ソーラー発電所を建設・稼働させています。

自然エネルギー拡大募金活動を継続

2014年７月１日から開始した「生長の家自然エネルギー拡大募金」のうち、2018年度は、福島・西郷ソーラー発電所を対象として、5,182口、51,820,000円（2018年４月１日～12月31日）の募金が集まり、累計金額では503,070,000円となりました。

なお、2016年から「生長の家自然エネルギー拡大募金」の日本語版と英語版のウェブサイトの公開が始まり、インターネットを通じても寄付を受け付けるようにして現在に至っています。

2017年からは、現地の太陽光パネルには寄付者名（希望者）を銘板に掲示することに加えて、日本語版ウェブサイトでも寄付者名を閲覧できるようにしました。

【生長の家自然エネルギー拡大募金のウェブサイト】

https://www.jp.seicho-no-ie.org/naturalpower/

自然エネルギー拡大募金のウェブサイト（2018年度）

太陽光発電、電気自動車、蓄電池の導入を助成

生長の家では、自然エネルギーの利用を促進し、低炭素な移動手段への転換を促進するために、組織会員を対象に、太陽光発電・小型風力発電設置、リチウムイオン蓄電池、電気自動車の導入に際して、助成金を支給しています。

2018年度の助成の実績は以下のとおりでした。

◆太陽光発電装置の導入件数　　24件：助成金額 2,756,000円
　※発電出力１kWあたり２万円

◆電気自動車の導入件数　　12件：助成金額 3,552,000円
　※１台あたり30万円を上限として、本体価格の10%まで

◆リチウムイオン蓄電池の導入件数　14件：助成金額 1,046,000円
　※１kWhあたり１万円

組織会員が導入した太陽光発電装置、電気自動車、リチウムイオン蓄電池

太陽光発電の出力を合算する仮想発電所で啓発

生長の家では、国内外の事業所をはじめ、国内の組織会員、海外の聖使命会員が設置している太陽光発電装置の発電出力を合算して表示する仮想発電所「生長の家国際太陽光発電所」として、その発電出力の総合計を、組織会員向けの機関誌、一般向けの３種の月刊誌に掲載して、自然エネルギーの拡大を啓発しています。

2018年12月15日の発電出力：14,426.32kW（前年比＋1,546.78kW）

一般向け月刊誌3誌に毎号掲載している「生長の家国際太陽光発電所」

“炭素ゼロ” 運動の成果

生長の家では、2007年度から教団の活動に伴うCO2排出量を実質的にゼロにする“炭素ゼロ”の運動を展開してきました。過去11年間で進めてきた“炭素ゼロ”の運動は、ISO14001の取り組みによる継続的改善などによって2018年度も成果を上げることができました。

主要３事業所が11年連続で“炭素ゼロ“を達成

2018年度の主要3事業所（国際本部、総本山、宇治別格本山）におけるエネルギー起源8項目（電気、都市ガス、LPガス、灯油、A重油、ガソリン、軽油、上下水道）のCO2排出量、並びに職員の出張・外勤の移動や本部主催の行事参加者の移動に伴うCO２排出量は、2007年度から11年連続で“炭素ゼロ”を達成しました。

2018年度　炭素排出量　1,601,844.5 kgCO2
　　炭素相殺量　2,190,583.7 kgCO2
　　総　合　計　－588,739.2 kgCO2

上：京都・城陽メガソーラー発電所
下：福島・西郷ソーラー発電所

その他６１事業所も“炭素ゼロ“を達成

2018年度の国内の事業所（教化部・練成道場）計61カ所におけるエネルギー起源8項目等のCO2排出量は、昨年に続き、排出権を購入することなく相殺することができ、“炭素ゼロ”を達成しました。

2018年度　炭素排出量　1,623,929.50 CO2kg
　　炭素相殺量　1,690,072.12 CO2kg
　　総　合　計　－66,142.62 CO2kg
　　※炭素相殺量とは太陽光発電の売電分、森林吸収分、自然エネルギー拡大募金による削減分などによって見込まれる炭素削減量のこと。

熊本県教化部会館（熊本県熊本市）の太陽光発電装置（60kW）

省エネ、太陽光、森林、メガソーラーによる削減効果

上記の“炭素ゼロ”の達成の要因としては、各事業所の省エネの取り組みが着実に進んでいること、電力購入先を二酸化炭素の排出係数の低いPPS（新電力）へ切り替えていること、事業所に導入されている太陽光発電の発電による炭素削減効果、さらに一部の事業所が所有・管理している森林のCO2吸収量による炭素削減。加えて、メガソーラー・大規模ソーラーの発電による炭素削減量（次頁参照）を、各教区からの自然エネルギー拡大募金の口数に応じて配分して、各教区の炭素相殺に用いていることが奏功しています。
また2018年度は、生長の家宇治別格本山が、京都府綾部市小畑町に1,255kW（1.255メガワット）のメガソーラー発電所を建設し、2018年6月26日から稼働し、当事業所の炭素削減効果に貢献しています。

宇治別格本山（京都府宇治市）が京都府綾部市に建設したメガソーラー発電所（1,255kW）

メガソーラー・大規模ソーラーの炭素削減量

生長の家で建設した京都・城陽メガソーラー発電所（2015年３月稼働）、福島・西郷ソーラー発電所（2015年12月稼働）の2カ所の発電量は合計で2,926,884kWhになり、同炭素削減量は1,493,661kgCO2となっています。

【2018年度の発電量】

生長の家京都・城陽メガソーラー発電所：2,004,935 kWh
（一般家庭の約674世帯分に相当）
生長の家福島・西郷ソーラー発電所　：　921,949 kWh
（一般家庭の約310世帯分に相当）
両発電所の発電量の合計　：2,926,884 kWh
（一般家庭の約984世帯分に相当）
両発電所によるCO2削減量の合計　：1,493,661 kgCO2
（杉の木の年間CO2吸収量に換算すると106,690本分に相当）
「自然エネルギー拡大募金」
１口（１万円）当たりの年間CO2削減量：31.658 kgCO2

メガソーラー・大規模ソーラー

発電量

984世帯分

CO2削減量

杉106,690本分

太陽光発電全体によるCO2削減量

2018年度、太陽光発電装置を設置している事業所は、56事業所、101カ所となっています。その総発電出力は約7,409.8kWに上り、年間に約741万kWhを発電し、約3,794トンのCO2削減量を生み出しました。（京都・城陽メガソーラー発電所、福島・西郷ソーラー発電所の発電量は、上記の実測値ではなく、NEDOによる推定値を採用）

設置事業所数	設置箇所	発電出力(設備能力)	年間推定発電量(発電出力×1,000)	年間推定CO2削減量(年間推定発電量×0.512)
56 事業所	101カ所	7,409.8kW	7,409,800kWh	3,793,818kgCO2

【56事業所の内訳】

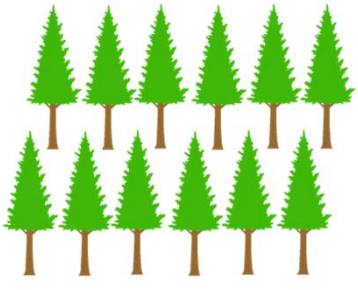
本部関係：国際本部、総本山、宇治別格本山、本部練成道場、富士河口湖練成道場
教化部 ： 50事業所（全教化部の約85%が設置）
関係団体 ： 世界聖典普及協会
※ 1kW当たり年間推定発電量 ： 1,000kWh（NEDOの資料より）
※ CO2削減量の算出根拠 ：（電力排出係数は、環境省・経済産業省公表係数の全国平均値0.512を採用）

事業所の太陽光発電装置全体

発電量

2,492世帯分

CO2削減量



杉270,987本分

森林保全活動への寄付と「一汁一飯」の取り組み

生長の家では、森林の減少を少しでも食い止めるため、WWFジャパンによる森林保全活動に寄付を行って支援をしています。また、国際本部“森の中のオフィス”では、毎月１回、食堂利用者に提供される昼食を、一杯のご飯と味噌汁だけにする「一汁一飯」を実施しています。

インドネシア森林保全プロジェクトに寄付

生長の家では、谷口雅宣・総裁の著書（谷口純子・白鳩会総裁との共著を含む）の益金の一部と、生長の家の月刊誌３誌の森林寄付金（１誌に付１円）のプール分から、2018年度は計5,267,671円をWWFジャパンによる「インドネシア森林保全プロジェクト」に寄付しました。この寄付金は、インドネシアのスマトラ島（テッソ・ニロ国立公園周辺、ブキ・バリサン・セラタン国立公園周辺）及びボルネオ島の３つの州（北カリマンタン州、東カリマンタン州、西カリマンタン州）において、以下の活動に使われました。

1. 残存する貴重な熱帯林を保護するためのパトロール、植林、育林、調査活動の実施
2. 絶滅危惧動物（ゾウ、トラ、サイ等）の調査と密猟防止パトロール
3. 地域住民への環境教育と持続可能な生計手段(天然蜂蜜の生産、エコツアーの受け入れ等)の確立

◆WWFジャパンのテッソ・ニロの森林保全のウェブページ
https://www.wwf.or.jp/activities/basicinfo/50.html

スマトラ島のテッソ・ニロ国立公園での植樹

森林保全のために、ゾウに乗って密漁防止のパトロールを行う

「一汁一飯（いちじゅういっぱん）」の取り組み

生長の家国際本部“森の中のオフィス”では、2014年４月22日から、世界の飢餓に苦しむ人々に心を寄せ、減らした食材費で寄付を行う「一汁一飯」の試みが始まり、生長の家の世界の各拠点に拡がっています。この活動は、飢餓問題の背景には、環境破壊や気候変動が関係していることをふまえ、人に“与える愛”を実践する宗教活動として取り組んでいるものです。

なお、国際本部では、１食の食事代400円のうち、300円が飢餓救済の募金にあてられます。2018年度の寄付金額は２１４，５００円（７１５食分）になり、国連WFPを通じて寄付をしています。

また、生長の家の産業人の組織である生長の家栄える会では、同会公式サイトで「飢餓救済クリック募金」を運営し、ユーザーがクリックをすると、協賛している企業等より、毎月そのアクセス数に応じた金額がWFP国連世界食糧計画の民間協力の窓口である認定NPO法人国連WFP協会を通じてWFP本部（ローマ）に寄付され、飢餓に苦しむ人々に食糧が届けられる仕組みを作り、活用しています。

2018年度の寄付金額は992,034円（協賛企業18社）となりました。

一杯のご飯と味噌汁だけの「一汁一飯」

国連WFP
https://www.jawfp.org/lp/general/

飢餓救済クリック募金
http://www.jp.seicho-no-ie.org/kiga/index.html

外部での発表、受賞、見学者の受け入れ

教団外での啓発活動としては、一般社団法人「日本エシカル推進協議会」が主催する「エシカルサミット」で生長の家が発表を行いました。また、紙を大量に使用する出版活動においても環境に配慮した取り組みを進め、2018年度は、「2018GP環境大賞」の準大賞を2年連続で受賞しました。また、“森の中のオフィス”では、一般の見学者を受け入れ、ZEBの施設やオフィスでの活動、その背景にある教えを紹介して、環境保全の啓発を行っています。

エシカルサミットで実践活動を発表

一般社団法人「日本エシカル推進協議会」が主催する「エシカルサミット『エシカル2018』－エシカル・サステナブルな消費と生産の先進的取組－」に、同協議会から招かれ、佐藤香奈美・生長の家白鳩会会長が、「生長の家におけるエシカル消費の実践活動」の発表を行いました。
同会長は、生長の家が世界の宗教団体として初めてISO14001を認証取得したこと、ノーミート・低炭素の食生活の実践例、PBS活動の概略、自然エネルギーの積極的な導入の事例などを紹介し、信仰に基づく倫理的な生活者として日々実践していることをアピールしました。

エシカルサミットで発表する佐藤白鳩会会長
（東京都港区：品川プリンスホテル）

「２０１８ＧＰ環境大賞」で、準大賞を２年連続で受賞

生長の家は「2018グリーンプリンティング（GP）環境大賞」で、準大賞を2年連続で受賞しました。このGP環境大賞は、一般社団法人日本印刷産業連合会が業界独自の環境配慮の基準を達成したGP認定の印刷工場を利用し、1年間にGPマークを表示した印刷製品をより多く発行し、環境に配慮した印刷物の普及に貢献している企業・団体に授与されるものです。生長の家は、会員向けの機関誌『生長の家』や環境記録簿の「生活の記録表」等の製作において、GP認定の(株)サンニチ印刷を利用してGPマークを表示して啓発していることが評価されました。

2018GP環境大賞（準大賞）の受賞式
（東京千代田区：経団連会館）

“森の中のオフィス”の見学者の受け入れ

生長の家では、“森の中のオフィス”への見学者を広く受け入れ、自然と調和し、地産の木材を採用し、太陽光発電、バイオマス発電と大容量リチウムイオン電池を組み合わせた、ゼロ・エネルギー・ビルディング（ZEB）を通して、“新しい文明”における宗教的建築物のモデルとしてアピールを行っています。
2018年度は、国内外の信徒をはじめ、新宗連静岡県協議会や東京大学宗教学・宗教史学研究室の教員・学生が来訪。また、生長の家栄える会ゲスト講師が会長を務める「エシカル生活を実践する会」のメンバーなどが見学に訪れました。“森の中のオフィス”のコンセプトやZEBについて、科学技術を駆使し、自然を大切にする心が成し遂げた建物に感動しました、家庭生活において、自宅での菜園や「一汁一飯」を実践し、周りにも勧めていきたいとの声がありました。
2018年度“森の中のオフィス”見学者数：686名
【“森の中のオフィス”のウェブサイト】
http://office-in-the-forest.jp.seicho-no-ie.org/

「エシカル生活を実践する会」からの見学者一行

ＺＥＢ（ゼロ・エネルギー・ビル）の成果

生長の家の“森の中のオフィス”は、国内で初となるZEBとして建設され、運用段階での年間のエネルギー消費量を省エネルギーによって極力削減し、太陽光発電やバイオマス発電による創エネルギーで、実質ゼロにするものです。このコンセプトを国内の教化部会館などの建て替えに順次適用させています。

“森の中のオフィス”（山梨県北杜市）

2018年度の“森の中のオフィス”の電力量年間集計では、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを６年連続で達成しました。年間の発電量585,957kWh、使用量446,698kWh、買電量89,461kWh、売電量は228,720kWh。なお、敷地内で発電した電力で自給した割合（電力の自給率）は80パーセントでした。
※PEB（ポジティブ・エネルギー・ビルディング）：建物の運用段階でのエネルギー消費量よりも自然エネルギーによって創るエネルギーが上回る建築物。

生長の家“森の中のオフィス”

メディアセンター（山梨県北杜市）

2018年度のメディアセンター（出版、広報部門のオフィス、スタジオ兼ギャラリー）の電力量年間集計では、“森の中のオフィス”同様、発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量52,526kWh、使用量28,038kWh、買電量15,962kWh、売電量は40,450kWhでした。

生長の家メディアセンター

原宿光明の塔（東京都渋谷区）

2018年度の原宿光明の塔（旧国際本部会館の一部を教団の歴史的建造物として残した建物）の事務所の電力量年間集計では、発電量 38,090kWh 、使 用 量 21,906kWh 、買 電 量 8,880kWh 、売 電 量 25,064kWhとなり、ZEBを超えてPEBとなりました。

生長の家原宿光明の塔

茨城県教化部（茨城県笠間市）

生長の家茨城県教化部会館は、2018年度も発電量が使用量を大きく上回り、ZEBを越えてPEBを達成しました。年間の発電量 56,620kWh 、使 用 量 29,623kWh 、買 電 量 15,611kWh 、売 電 量 42,608kWhでした。

生長の家茨城県教化部会館